金のかんのん様

ジャンル：民話

むかし、引野の本床（きどこ）というところに、古いいわれのある家がありました。この家は、むかし源頼光（みなもとのらいこう）いう殿様の家来で、渡辺の綱の、子孫だったということです。さて、この家に、古くから伝わっている、金のかんのん様がありました。大きさは、一寸八分（二～三センチぐらい）の小さいかんのん様ですが、とても大事にされていました。

ところが、この子孫が、だんだん働くことが、いやになりはじめ、なまけ者となりました。そのうちに、とうとう、たくさんある田まで、売らなければならなくなったのです。

その売り田の中で、三反ほどは、桜井という家に売られていきました。田を買った桜井の人は、はんたいに、たいへん働き者の家でした。

ある日、田を買った家の人が、いっしょうけんめい、田をたがやしていたところ、田の中から、ピカッと光る、金のかんのん様が、出てきたのです。

「こりゃ　もったいない。田の中にかんのん様がうもっていらっしゃるとは。」

と、ていねいに洗ってよくみると、どこかでおがんだような気のするかんのん様です。

「ありや、これはこの田をこうた渡辺様のところのかんのん様だ。」

と気がつき　さっそくおききしてみると、渡辺様の守り本尊でした。かんのん様はいつのまにか、渡辺様の家から姿を消されて、なくなっておられたのです。

これを知った　村の者は、

「かんのん様は、なまけ者のいる家を、きらわれて、はたらき者のいる家へうつられたのだろう。」

と、うわさするようになったそうです。

それから何年かたったあとのことです。働き者の桜井家が火事になり、家が全焼してしまったのです。もちろん、大事にされていた金のかんのん様も焼けてなくなってしまいました。家の者は

「ほかのものは　焼けてもええが　あのかんのん様だけは　お助けしたかった。」

とあきらめきれない気をもっていました。

それから数年、桜井家の人びとは、一生けんめい働き続け、もとどおり、焼けた家も立派に建てなおりました。

ところが、また不思議、田の中から、焼けてなくなったはずの金のかんのん様がみつかったのです。家のものは、二度びっくり、いよいよ、このかんのん様を大事にし、朝な夕なにおがむようになったそうです。

今でも、この家には毎年二月二十日、（かんのん様が見つかった日）檀那寺のお坊様をよんで、ねんごろに供養されています。

あら、あら、不思議なこともあったものです。

出典　「阿知須ふるさと今昔　民話編」
平成十一年二月　発行
阿知須町教育委員会　発行・編集